

こころで

見る

奈良

もっともこと  
知りたい  
奈良10

## 興福寺中金堂

今年の10月に、興福寺中金堂(ちゅうこんどう)の落慶(らっけい)法要が営まれる。

興福寺は、藤原鎌足の妻、鏡女王(鏡女王ノカ)がみのおおきみ(カ)が、現在の京都市山科区に創建した。山階寺(やましなでら)という。

やがて藤原京(奈良県橿原市)へ遷り、さらに平城遷都によって奈良に遷って、興福寺と呼ばれるようになった。

興福寺は平城京の東の端の高台に位置する。中金堂は、伽藍のなかでもっとも重要なお堂だが、7度も焼けている。

よく知られているのは治承4年(1180)の平氏による焼き討ちだろう。反平氏の立場だった興福寺は、平清盛が派遣した重衡(しげひら)によって、すべてを焼き尽くされた。

これは4度目の焼失である。このほか、近くの民家からの飛び火、お堂の燈明の火が燃え移った、近くの僧房(僧の住居)に雷が落ちた、講堂に侵入した盗賊が灯りに用いた火が燃え移ったなど、火災の原因はさまざまだった。

驚かされるのは嘉暦2年(1327)の事例で、興福寺の僧同士が争って、中金堂に火を放ったのだという。

最後の火災は、江戸時代、享保2年(1717)のことである。講堂、中金堂、西金堂、南円堂、中門、南大門などが焼けてしまったが、この折にはなかなか再建できなかった。



覆屋のなかの新しい中金堂。手前に穴がふたつあいた礎石がみえる。(2018.4.8撮影)

中金堂は、なんと100年以上が過ぎた文政2年(1819)に、奈良町の人々の奇進によって、ようやく建てられたそうだ。

興福寺は、創建当初の姿をとても大切にしている。元通りに再建するのを原則としている。この時の中金堂は規模が小さかったため、仮堂のような扱いを受けてはいるが、地元の人たちの奇進で建ったというのは、興福寺が地元根付いていたあかしであって、詳しい経緯はよく知らないが、いい話だと思っている。

この中金堂は老朽化が進み、平成12年(2000)に解体された。そして平成22年(2010)に新しい中金堂の立柱式がおこなわれ、今年ついに、当初の規模(東西36・6尺、南北23・0尺)の中金堂が完成する。

興福寺境内整備のための発掘調査は平成10年(1998)に始まり、程なくして中門跡から穴がふたつあいた奇妙な礎石が見つかった。

まだ小さかったわが家の3人の子どもたちは、興福寺に来ると、「ブタの鼻やく」と言いながら、この礎石の上を何度も飛び超えていた。

文・西山 厚

(帝塚山大学文化創造学科教授)

○シリーズは今回で終了します。ご愛読ありがとうございました。

PR

企画・制作 産経新聞社メディア営業局